

# 豚胚移植関連技術開発の取組

(独)家畜改良センター

# 1. 発情誘起処理技術

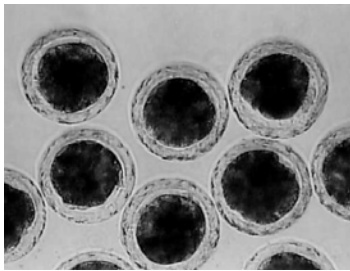
- 春機発動直前の豚については、ホルモン処理による発情誘起及び過剰排卵処理が効果的に実施されているが、一旦性成熟に達した雌豚については反応の安定性が低い。
- センター本所では性成熟豚を利用することが多いため、発情の同期化は人工流産を用いた方法を用いており、成功率が比較的高位で安定している。
- センターにおける、同方法をもちいた新鮮胚外科的移植の結果(H13～H14年度)、
  - \* センター本所内での移植成功率は80%以上
  - \* センター本所から茨城牧場に胚を輸送した場合は50%前後

## 2. 胚保存技術

○ マイクロドロップ法および新しいガラス化器具を用いて、トリプシン処理に適している反面、低温保存が困難な発育ステージ（後期桑実胚～胚盤胞）のブタ胚のガラス化保存に成功した（H14年度）。

\* 融解後の生存率（体外培養下） 約70%

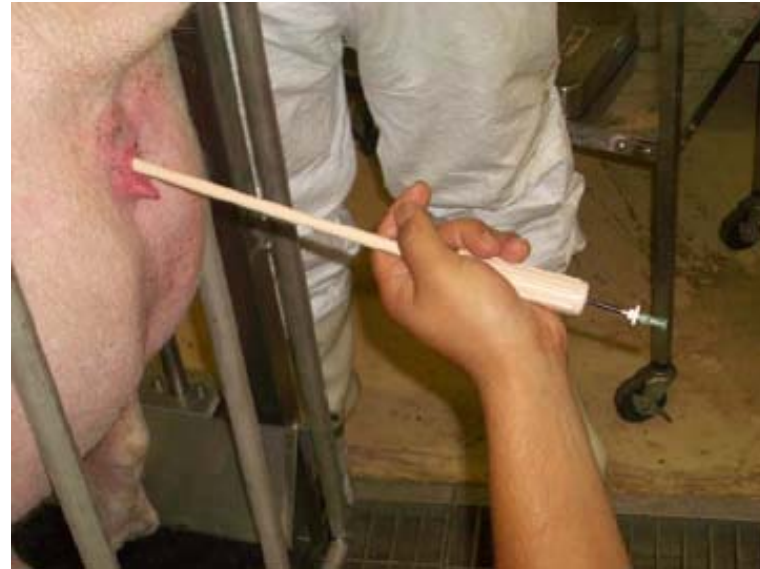
\* 移植成績（30個／1腹） 受胎率 40% 1腹産子数 8.5頭



○ 平成14年度に海外導入した大ヨークシャー3腹分の胚をガラス化保存し、17年度に移植した結果、2腹分の子豚（♂、♀1頭ずつ）を生産したことから、ガラス化保存ブタ胚が遺伝子保存に有効であることを確認。

# 3. 非外科移植技術

- 生物資源研究所等との高度化事業で開発された非外科的移植器具を用いて、2頭に非外科的移植を実施した結果(H17年度)、  
**1頭が分娩し、11頭の子豚を生産した。**



## 4. 体外胚生産技術

- 生物資源研究所等との高度化事業で、純粋豚からの効率的な体外胚生産技術の開発に取り組んだ結果(H16年度)、**血統が明らかな体外生産胚由来の中ヨークシャーを生産した。**

